フランス留学を振り返って

金侑蘭

4 回に分けてフランスの主に食生活について紹介してきた。この約 5 ヶ月間の留学生活で日本にいた頃には考えれない体験をたくさんした。今回は留学を通して興味を持ったこと、感じたこと、これからの考えについて触れていく。

私は今回、フランスの北東部に位置するストラスブールに留学していた。ストラスブールはすごく古風な街で、建物は築 100 年のものがざらにある。街が世界文化遺産にも登録されており、街の中心にはこれもまた世界遺産であるストラスブール大聖堂がある。日本とは街並みや文化が 180 度と言っていいほど違い、毎日が発見ですごく興味深かった。

フランス留学を決めた理由は、特にフランスに行ってこれがしたいという明確な理由はなく、第 2 言語で学んでいて、せっかくなら行ってみようという軽い気持ちだった。しかし、思っていた以上に壁にぶつかり、いい経験ができた。その一つとしてボランティア活動がある。

私が行っていたボランティア活動はアルザス補習校といい、日本に繋がる子どもたちに日本語を教える補習校である。1986 年に設立され、日本政府からの支援と児童生徒の保護者から成り立つアルザス日本語教育協会（APEJA ： Association Pour l'Enseignement du Japonais en Alsace）により運営されている。対象児童は幼稚園児（3 歳以上）～中学校 3 年生までで、2019 年 11 月現在の生徒数は 49 名、教員は 6 名である。クラスは幼稚部、小中学部合わせて 6 クラスあり、さまざまな学年の生徒が混ざっているため配慮としてクラス表記となっている。通っている子どもたちは、日本国籍の子どもはもちろん、日仏カップルの子ども、両親がフランス人だが日本生まれの日本育ちで日本語を忘れないために通っている子ども、など様々な理由を持って参加している。ストラスブールはドイツとの国境に位置するため、ドイツから通っている子どももいる。子どもたちの日本語能力は私が想像していたよりはるかに高かったが、日本人が多いパリと比べると日本語能力が低いのが課題だと補習校の教員は言っていた。

授業内容としては日本語や日本文化を学んでおり、放課後には書道や季節の行事、日本の伝統文化を知る機会になる様々な活動が用意されている。日本にいるときからこのボランティアの存在は知っており、日本語コースに所属していることもあって興味があり参加に至った。ボランティアの内容としては、授業の中で先生の手が回りきらないところをボランティアがサポートする。私がサポートしたクラスは小学 3、4 年生の教科書を使うクラスで、生徒数は日本の学年で小学 3 年生から中学 3 年生まで 10 人いた。このクラスでのボランティアは教科書音読や漢字テスト、聞き取りテストで子どもたちが分からなかったところのサポートが多かった。

私はこのボランティアに参加し、日本人の温かさをとても感じることができた。私自身やはり、知らない土地での生活で精神的に参ってしまっていた時期があり、その時にボランティアに参加すると気が晴れ、とても有意義な時間を過ごすことができた。現地で生活している日本の方から聞く話はどれも為になり良い学びの機会になった。日本で塾講師としてアルバイトをしていたのだが、自分は子どもが好きで人に何かを教えることも好きなのだと再確認することができた。日本を離れたからこそわかる日本文化の良

さにも気づくことができた。日本からだいぶ離れたこの街で日本人と交流することができ、温かさに触れたのは私の中でも大きく、いい体験であった。

もうひとつ私にとってかけがえのない経験だったのは、語学学校での生活だ。日本では日本語コースで日本語教師になる授業を取っていたわけだが、日本語とまた文法が違うからなのか、フランスの学校では教え方が違ったのが私自身ものすごく興味を持った部分であった。フランス語には単語に性別がついている。これは私がフランス語に興味を持った理由の一つだが、スペイン語やイタリア語も同様に性別があり、珍しいことではない。単語に性別がない言語の学習者に対しどのような方法で教えるかも見どころだった。学校で先生が話すフランス語は聞き取れるのに、家に帰るとホームステイ先のマダムのフランス語が聞き取れない。このことに気づいたとき、もし自分が外国人と日本語を話すとき、やさしい日本語を選び話せるだろうか、日本語にも英語にもない文法を学習したとき、学習者が分かるやさしい日本語で説明できるだろうかと、自分が教える立場になったときのことを考えるのも楽しかった。そして、それぞれ違う文化を持っている学習者に対し顔色一つ変えず対等に接している先生を見て、自分もこの人のようになりたいとすごく影響を受けた。授業はフランス語だけで進められるのだが、ほぼ無知でフランスに行った自分がここまで努力できるのか、這い上がることができるのかと自分の力を確認することができた場所でもある。

私がこの留学中に新たに興味を持ったのが、アルザスの歴史である。ストラスブールは、アルザス地方に位置する。ローマ帝国から始まり、フランス領、ドイツ領を繰り返し、ナチスが占領していた時代もある。フランス領からドイツ領に変わったとき、学校ではドイツ語を話すことを強いられ、家ではフランス語やアルザス語を話したという過酷な過去がある。ストラスブールとドイツを繋ぐ橋は戦争中何回も壊されたという。街並みがほとんど昔と変わらないので、自分がいるこの土地でどれだけの戦争があり、血が流れたのかと考えると心が痛い。今やストラスブールからドイツのケールまでのトラムが開通しており、行き来がスムーズである。ドイツのトラム駅近くの公園にはドイツとフランスの国旗が立っている。ここまで来るのにどれだけの困難があったのかと考えさせられた。アルザスはフランスとドイツの文化が混ざっているため独自の文化がある。それを街で発見するのもまた面白い。滞在中何回も歴史博物館に足を運んだ。日本よりも歴史が長いのでとても興味深く感じる。これからも継続してアルザスの歴史を勉強していきたい。

そして私はストラスブールで衝撃的な再会をした。それは、私が小さいときに家にあった絵本の作家がこのストラスブール出身であったことだ。彼は Tomi Ungerer トミー・ウンゲラーといい、児童作家、イラストレーターである。昔好きでよく読んでいた絵本であったためとてもよく覚えており、こんな形で再会するとは思ってもみなかった。彼は昨年の 2 月に亡くなっており、ストラスブールでも追悼セレモニーがあちこちで行われたらしい。彼の美術館に何回も足を運び、絵本もたくさん買い、彼の作品をもっと好きになった出来事であった。幼少期の出来事がこの歳になっても生きてくるというのが驚いた。

ここで挙げたのは私がストラスブールで体験したことのほんの一部である。この約 5 ヶ月間を振り返るとすべてが一瞬で、とても短く感じた。来てすぐの不安で押しつぶされそうな気持ち、伝わらなくてうずうずした気持ち、初めてカフェに入って注文できたあの言葉では言い表せない嬉しい気持ち、生活していく中で嫌だと感じたこと、余裕が

なく焦る気持ち、すべてが宝物である。聞く情報と自分が自ら体験したこととは受け取られ方もだいぶ違う。そして、この留学中自分を改めて見つめ直すことができた。自分の欠点、長所を見つけることができた。自分と向き合い、自分はこんな人間だと理解することができた。留学という機会をいただいたこと、後押しをしてくださった先生がいたこと、成長できたこと、無事に留学を終えることができたこと、私と一緒に留学に行った友達と一緒に乗り越えることができたこと、すべてが宝物で感謝である。このストラスブールでの経験を財産に、成長の糧にできればと思う。ストラスブールに来れたことに感謝である。そして、またこの街に戻ってきたい。